

アルピニスト 野口 健氏に聞く

聞き手 山岡 三子 ●フリーアナウンサー、名古屋短期大学客員教授

無邪気に喜べない 富士山の条件つき世界文化遺産登録

山岡 本日のゲストは、アルピニストの野口健さんです。野口さんは、一六歳でのモンブラン登頂を皮切りに、二五歳のときに三度目の挑戦でエベレストの登頂に成功。世界七大陸最高峰登頂の世界最年少記録(当時)を打ち立てられました。

その後、エベレストや富士山における清掃登山、環境メッセンジャーの持続的・広範囲な育成を目指した「野口健環境学校」、さらには戦没者の遺骨収集など、多彩な活動を展開されています。なかでも、富士山での清掃登山活動は一四年になり、野口さんのご努力もあって、二〇一三年六月、富士山がユネスコの世界文化遺産に登録されました。

野口さんにとっても、富士山の世界文化遺産登録の喜びはひとしおでいらつしやったのではないのでしょうか。

野口 登録されたとはいえ、実は無邪気に喜べる状況にはないというのが実際のところ。というのも、富士山の世界遺産

登録はあくまでも条件つき、いわば仮免状態で、登録の陰で、世界遺産の審査機関であるイコモス(ICOMOS)から宿題を与えられ、関係者は頭を抱えているというのが実情なんです。

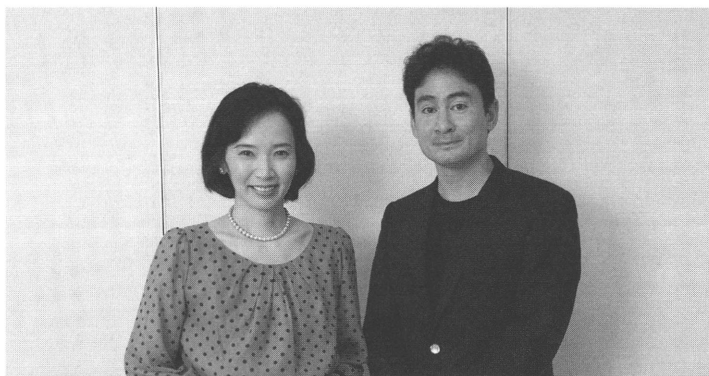
山岡 イコモスからは、どういう宿題を与えられたのでしょうか。

野口 環境問題、景観問題、開発抑制、さらには入山者数が多すぎるなど、さまざまな問題点への指摘がなされました。そのうえで、登録から三年後の二〇一六年二月一日までに、諸問題への対処法を報告書で提出するようにという条件を突きつけられました。これは極めて異例なこと。です。

もし、報告書の内容がイコモスを納得させることのできるものでなければ、警告を受けることになり、登録が取り消される可能性すらあるんです。

世界遺産への登録という事実だけが独り歩きして、日本中が歓喜に沸いた一方で、このことはメディアもあまり報じていませんから、意外に知られていません。

さまざまな問題が未解決なまま、積み残されているというのが実情で、僕は以前か



野口 健氏（右）と山岡 三子さん（2014年10月23日 亜細亜大学にて）

ら、そうした問題を一つずつクリアし、その結果として世界遺産に登録されればいいと言ってきました。今回の登録は僕にとっでは予想外のことで、むしろ、一度落とされたほうが、なぜ登録されなかったのか、富士山が抱える問題は何かをみんなで考え、共有するきっかけになると思います。

山岡 でも、世界遺産への登録が富士山を良い方向に変えるチャンスととらえることもできますよね。

野口 もちろんです。登録された以上、いかに多くの人たちが富士山の現状を知り、富士山を守るルールづくりを進展させるかが今後は大きな課題になります。

イコモスから突きつけられた条件は、僕が以前に委員の一人として参画していた環境省の委員会でも、有識者から指摘されていたことばかりだったので、内容的には驚くようなものではありませんでした。

これまでも関係者の間で共有されていたことが、イコモスからの宿題としてあらためて多くの人の目に触れることになり、問題から目を背けてきた関係者も、向き合わざるを得なくなったわけです。さらには、

期限を突きつけられたことも大きくて、これを契機に、ルール化の動きが加速すればいいと思います。

環境問題は「対人間」「対組織」

立場が変わると、問題の所在が変わる

山岡 環境省の委員会でも指摘されているが、対策がこれまで進まなかったのはなぜなのでしょう。

野口 そこが環境問題の難しいところで、環境問題とは「自然」を相手にした活動と思われがちですが、実は対人間、対組織の問題なんです。

特に富士山には、さまざまな人がいろいろな立場で関わっています。関わるときの立場が変わるとものごとのとらえ方も変わってきますから、やっかいなことが顕在化するようになります。何か行動を起こそうと思っても、必ず壁にぶつかることになり、その壁が実は人間社会そのものであることが多いのです。

僕が行った清掃登山もそうで、二〇〇〇年から富士山で活動を始めたときも、山小屋の関係者の方にとってみると、実ははな

はだ迷惑な面があったと思います。

山岡 わざわざ清掃をしてくれるのですから、感謝されこそすれ迷惑がられることはないと思ってしまうのですが……。

野口 僕が清掃すると、そこにゴミがあるという事実が公になってしまうんです。富士山はもともと、五合目から上は特別保護区に指定されていて、ルール上は、ゴミを出した人を環境省は摘発しなければなりません。ところが、そのルールが定まる前からの長年の慣習では、ゴミを地中に埋めるということをしてきています。長年の慣習なので環境省もしぶしぶ目をつぶってききましたが、僕が行動を起こして「富士山にゴミがある」という事実が世間に広まると、環境省も動かざるを得なくなります。山小屋を経営している立場からすると、僕は極めて迷惑な存在なのです。

山岡 一種のタブーに触れてしまったわけですね。

野口 富士山麓への不法投棄も同じで、今でも業者が、粉砕した産業廃棄物を土に混ぜて樹海に捨てて来ます。不法投棄された廃棄物は誰が処理すべきかというと、富

士山は国立公園とはいえ、私有地が大半ですから、現状の制度では、地主さんが、たとえ他人が勝手に捨てたゴミだとしても、自腹を切つて処理しなければならぬんです。そうすると、不法投棄の存在を伝える僕のような存在は迷惑なんです。

「富士山」という自然・文化 「富士山」という観光地

山岡 いろいろな立場の人がいるために、なかなか有効な手を打ち出せなかったということがありますね。

野口 さらにもう一つ、富士山には日本を代表する観光地という要素も加わります。多くの人々が観光を生業として生活しているため、環境問題一辺倒ではうまくいかないんです。環境問題は観光問題と表裏一体で、環境色が強すぎて規制が進むと、自分たちの生活に関わりますから、地元は抵抗するんです。

山岡 落としてどこをどうするかという問題ですね。

野口 そうです。富士山の年間の登山者は三〇万人にも及びます。イコモスにも指

摘されたように完全にオーバーヒートの状態ですが、単純に入山規制を行うのは現実的ではありません。

「霊峰富士」が評価されたわけですから、江戸や明治の富士講の時代に戻って、年間の入山者を二万人程度に戻すべきだと主張する人もいます。それで地元の地域社会が合意するかというと、するはずがなく、地元がうんと言わなければ、ものごとは一ミリたりとも進まないのです。

山岡 となると、国や自治体など、行政がリーダーシップをとって、打開に動く必要があるのではないのでしょうか。

野口 実はそれも難しいんです。なぜかというと、富士山にはトータルな責任機関が存在しません。八合目以降はほとんどが私有地ですから、国が規制を主導することは困難なのです。

自治体を見ても、富士山は静岡と山梨の両県にまたがっていて、本来なら、両県で連携して富士山を守る体制を築かなければいけないのですが、それもできていません。そもそも、山頂がどちらの県にあるかも定まっておらず、地図を見ても、八合目より

上は県境が消えているんです。

山岡 それぞれに自分たちの富士山という意識が強いんですね。

野口 さらに、両県の立場も大きく異なります。静岡県は、富士山に対する経済的な依存度が低いこともあって、入山規制などにも積極的ですが、山梨県は富士山観光が産業に占める割合が大きなウェイトを占めているので、積極的に規制を打ち出せない。両県の足並みがそろわないのです。

そうしたしわ寄せは、現場でも顕在化していて、山梨県側の登山ルートの開山日が七月一日である一方で、静岡県側は七月一日と異なっています。そうすると、山小屋のオープンも静岡県側の開山日に合わせられているため、山梨県側の開山日からの一〇日間は山頂のトイレが使えないという大問題が生じます。トイレが使えないので、登山者はトイレではないところをトイレにせざるを得なくなり、それでまた富士山が汚れてしまうんです。

山岡 そうした状況の中で、どのように問題を解決していくかについて、野口さんは著書でご提言されていますね。

「環境」と「観光」の両立を目指す 富士登山鉄道の敷設

野口 結局、状況を前に進ませるには、環境と観光のバランスをとった提案をしないといけません。そのことを踏まえた具体策が「登山鉄道」の敷設です。

鉄道を五合目まで走らせることができれば、マイカー規制や排ガス問題の解消にもつながりますし、登山鉄道の本数や乗員数を限定することで、登山者数もコントロールできるようになります。

それによって夏季の登山者数は減少するかもしれませんが、一方で冬の観光客を増やすことができるようになります。冬の銀世界の富士山はとても魅力的なのですが、今の冬の富士山は車が通れませんが、銀世界の富士山を体験することができる人は極めて少数です。

山岡 それを新しい冬季の観光の目玉にするということですね。

野口 たとえトータルの登山者数が減ったとしても、全体として観光客が維持され、地元にお金が落ちれば誰も反対しないと思

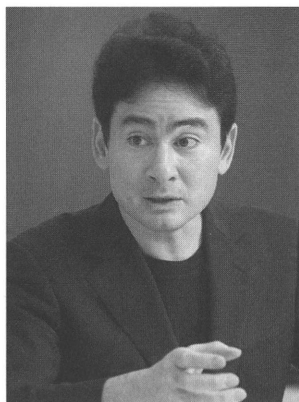
うんです。

環境問題は百かゼロではなく、多くの人が納得し、合意できる落としどころを探ることが重要なんです。

山岡 野口さんがもう一つ提案されているのが、富士山レンジャーの充実ですね。

野口 レンジャーは富士山を守るシンボルであり、柱であるというのが僕の考えです。レンジャーの存在は、登山者のマナーや意識向上とともに、レンジャーを中心とした市民有志やNPO法人の設置など、さまざまな団体の連携が進むことが期待されます。現状、山梨県には六人のレンジャーがいますが、静岡県にはいませんので、静岡県側にもぜひレンジャーを配置してほしいですね。

これまでお話ししたように、両県では考え方や対応に温度差があります。それを打開するために必要なことは、現場の人々の連携です。もし、静岡県でも富士山レンジャーが置かれるようになれば、現場で一緒にパトロールしたり、共同作業するようになり、そうした連携が両県が一致して富士山を守る活動を行う突破口になると期待し



ています。

アメリカのレンジャーには逮捕特権があるのに対し、日本では大きな権限を与えられていないといったように、法整備の状況が異なっていたり、海外の国立公園では、レンジャーが現場のリーダーとして尊敬を集める存在であるのに対して、日本ではレンジャーがいくら注意しても言うことを聞いてくれないということがしばしば起きるなど、レンジャーのステータスが低いという文化的な違いなどは今後の大きな課題ですね。

山岡 現場からものごとを変えていくのが、一番の近道ということですね。

野口 自分の活動を振り返っても、それ

は確かです。富士山での清掃登山を始めた当初は、集めたゴミをどこに持っていくかということに頭を悩まさなければいけませんでした。地元由市町村に相談しても「これはあなた方、民間団体が勝手に集めたゴミなので、行政は対応できません」と拒否されました。

「現場からものごとを変える」信念が生む 活動の継続、信頼の構築、連携・協力

野口 とはいえ、活動を継続し、信頼関係が築けると、地元の自治体も協力してくれるようになりました。今では、自治体も不法投棄の現場を発見すると、僕らに連絡がある仕組みになっていて、僕らで人を集め、一種のイベントとして清掃を行い、集めたゴミを行政が処理するという一連の流れを構築することができました。行政だけでも限界があるし、NPO法人だけでも限界がある。だからこそ連携が重要なのです。

山岡 行政とNPO法人が互いを補完し合うということですね。すばらしいことだと思います。

野口 さらにもう一つ大事な活動主体と

なるのが企業です。富士山の清掃登山には毎年七〇〇〇人の方が参加してくれていますが、その約三分の一が企業関係者です。さらに、集めたゴミの処理費用までも企業が負担してくださっています。処理費用は一トン当たり約八万円というコストがかかるので、大変ありがたいお話です。

山岡 そうした連携の成果として、富士山にはどのような変化が起こっていますか。

野口 登山者の意識も変わり、ゴミのポイ捨てもはなくなりました。環境省の補助金制度も設けられ、バイオトイレも数多く設置されるようになりました。一四年前から考えると、大変な進展です。

山岡 野口さんは亜細亜大学でも、教育の一環として、学生を連れて富士山の清掃活動などを経験させているそうですね。

野口 ええ。清掃前に、地元のNPO法人や行政の方など、さまざまな立場の人から話を伺ったうえで、現場で清掃活動をし、最終的には富士山をどう守っていくのかを文書にまとめ、山梨県の知事に一種の政策提言として提出するということを実践しています。単なる体験学習にならないように、

事前学習や事後の振り返りなどにも力を入れていきます。

山岡 政策提言の作成まで学生たちが行うのですか。

野口 そこまでやらないと意味がないと考えていますし、関係者の話を聞くのも、とても重要な学びだと思います。

今の学生は、インターネットなどを通じて資料を収集することは得意ですが、フィールドワークが苦手なんです。

僕は二〇一四年に『世界遺産にされて富士山は泣いている』という本を出しましたが、本を書くにあたって僕がお会いして話を伺った人の数は一年間に五〇人を超えました。五〇人を超える方々からお話をお伺



山岡 三子さん

いすることは、大変な労力が必要とすることではありましたが、そのおかげでいろいろな立場の人に接することとなり、彼らは何を考えているのか、行政が動けない背景には何があるのかを理解することができました。

山岡 さまざまな立場の人の話を聞くことで、問題がより立体的に見えてくるわけですね。

野口 おっしゃるとおりです。その観点から、二〇一五年からは学生を巻き込んでさらに活動をパワーアップさせる予定で、授業の一環として、一〇〇人以上の学生と現地を訪れ、地元の関係者に話を聞きに行く計画を立てています。一〇〇人がそれぞれ取材することで、とてつもない量の情報を一気に集めることができるともくろんでいます。

山岡 学生と活動することで、野口さんご自身も刺激を受けることもありますか。

野口 もちろんです。僕はどつぶり富士山の問題に入り込んでいる人間ですから、ものの見方が固まっちゃってるところがあると思うんです。しかし、学生たちは

新しい目線で問題を見ますから、僕が気づかないことも発見してくれるんじゃないかと期待しています。

南極登山を成功に導いてくれた 学長の「衛藤基金」

山岡 ところで、野口さんにとって、亜細亜大学とはどういう存在ですか。

野口 母校には、学生のときからとにかく大事にしていたという特別な思いがあります。何しろ、南極の最高峰に登れたのは、衛藤藩吉学長（当時）のおかげでした。その意味でも恩義を感じています。

山岡 衛藤学長のおかげとは、どういうことか教えてください。

野口 当時、南極で登山するためには六〇〇万円の費用が必要でした。僕が発売の一月前の段階で集めることができた資金は四〇〇万円ほどで、計画が頓挫しかけていたんです。

そうしたとき、キャンパス内で衛藤学長に「おい、南極行きは大丈夫か」と声をかけられました。まずいなと思いつつ、正直に「資金が二〇〇万円が不足しているので

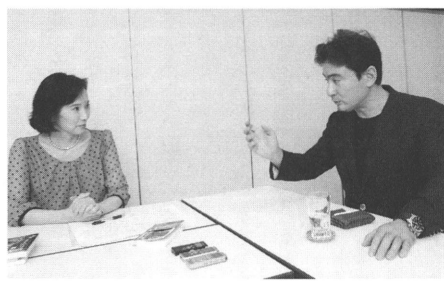
今回はたぶんだめです」と答えたんです。すると、「君は二〇〇万円を夢をあきらめるのか」と一喝されて、「あとで学長室に來い」と言われたんです。ああ、また怒られると思って、学長室を訪れると、衛藤学長から分厚い封筒を渡されて、中を見ると二〇〇万円入っていました。とっさにもらえまさんと返そうとしたのですが、「早く持っていけ、さもないと俺が欲しくなる」とピシッと言われて、それを元手に南極に行ったんです。あのお金がなければ、僕は南極に行けませんでした。

山岡 すばらしい先生ですね。

野口 本当に粋な先生で、そのお金は、衛藤先生が個人的に積み立てた基金だったんです。先生は、亜細亜大学で学ぶ留学生をサポートするために、本の執筆料や講演料を自ら「衛藤基金」としてプールされていて、そこから捻出してくださったんです。

一芸一能入試会場の猛者たち

山岡 当時と比べて、今の学生の気質は変わりましたか。



ちが数多く入学しました。

野口 以前は、変わった人間が多かったですね。特に衛藤先生が始められた「一芸一能」入試では、強烈なインパクトをもった学生が

けん玉日本一だった先輩もその一人で、その先輩は高校生の部ではなく、社会人の部で一位でした。どの分野でも国でトップをとるといえるのはすごいことです。実際、究極の集中力の持ち主でした。ほかにも和太鼓や三味線の腕前が抜群の学生もいたし、面接のときに包丁をもってきて魚をさばいたりする、風変わりな学生もいました。

山岡 スポーツ推薦で入学する学生は少なくありませんが、それとは少し切り口が違いますね。

野口 そうそう。サッカーや陸上などは花形ですが、亜細亜大学の「一芸一能」は一般には注目されない、マニアックな人間たちばかりが集まりました。そこがおもしろかったし、一般人試で入った学生にとっても刺激になったと思います。

でも、そうした強烈な個性をもった受験生も少なくなってきたんでしょうね。二〇一四年、僕が通っていた国際関係学部では「一芸一能」は廃止されてしまいました。少しもったいないなという気はします。

僕が亜細亜大学で学ぶことができたのは、この入試制度のおかげです。集団面接のときのことは今でも覚えていて、一人八分ずつ自己アピールしたんです。

山岡 どのようなアピールをされたのですか。

野口 僕の強みは登山歴しかありませんでしたから、すでに登頂していたモンブランとキリマンジャロでの経歴を訴えようと事前に決めていたのです。

しかし、周りのアピール内容を聞いていて、「とてもじゃないけど太刀打ちできない」と感じ、面接中に戦略の変更を余儀

くされたんです。それくらいほかの七名のアピールは個性的で、すごい特技や実績に圧倒されたんです。でも運がいいことに、僕の順番が八名中の最後だったので、戦略を変える時間があつたんです。

山岡 考えた結果、どのようなことをおっしゃったのですか。

野口 「僕はモンブラン、キリマンジャロに登りましたが、はつきり言って大したことではありません。これまでの実績はありませんが、仮に大学に入ったら、七大陸最高峰をすべて登頂します。もし途中で断念することがあれば、僕は責任をとって、大学を中退します」と宣言したんです。

すると、先生方が一瞬きよんとした顔になりましたが、次の瞬間には「こいつおもしろいな」という顔をしたんです。これは行けたかなと思っていたところ、合格することができました。このときの宣言のおかげで、登山家としての目標も決まってしまったようなものです。

山岡 すばらしい発想の転換ですね。

就職活動などでも、企業は、学生が何をしたかより、会社に入ってから何をしてく

れるのかということに関心を寄せると言いますよね。それをみごとに実践された例として、ぜひ学生にも伝えたいエピソードですね。

やることが「考えること」しかない ヒマラヤでのかけがえのない時間

山岡 三四歳のころから始められた遺骨収集活動を含め、さまざまな活動を展開されていらつしやいますが、今後の展望についてお聞かせください。

野口 もちろん、新しいことにチャレンジしたい気持ちもありますが、今は、これまで行ってきた活動を続けていく気持ちのほうが強いですね。富士山の活動も一四年目ですがゴールには程遠く、富士山を守る仕組み、ルールを確立させるところまでは到達させたいです。おそらくあと一〇年ぐらいはかかると思います。

山岡 野口さんが取り組むテーマは、完結のない大きなテーマばかりなので、活動してしんどくなったりしませんか。

野口 一年間ずつと活動していると、年末ぐらいにしんどくなってくるので、ヒマ

ラヤに行って一カ月ぐらい過ごしています。その時間帯だけは、初めてヒマラヤに行つた一九歳のときに戻れるような気がするんです。それが自分にとってのリフレッシュする時間になっているように思います。

山岡 日本での日常とは違うでしょうね。

野口 全然違います。ヒマラヤでの時間はとてつもなく長いんです。悪天候になると、狭いテントの中で四、五日待機していなければならぬときもあります。

テレビはないし、本も重いので何冊もつていけませんから、やることが「考えること」ぐらいしかないんです。でも、そんな時間を過ごせるのもヒマラヤならではのことで、そうした環境に身を置くと、気持ち的自由になって、新しい発想も出てきます。日本でさんざん考えても見つからなかった答えが、見えてきたりもする。ゆつたりとした時間の中で気持ちが解放されるのでしょね。

ヒマラヤの時間はとても大事だし、自分の原点であると感じていますので、今後もしさまざまな活動にチャレンジしながら、ヒマラヤ通いはずつと続けたいと思います。